

占領期における教育関係雑誌所蔵調査報告

小 熊 伸 一*

A Study on the Educational Journal of the Occupation Period

OGUMA Shinichi

要 約

本稿は、占領期に創刊された教育関係雑誌の所蔵状況と雑誌の性格について、プランゲコレクションに所蔵されていない雑誌を中心にまとめたものである。なかでも、今回は、国内では、数多くの教育関係雑誌を蒐集している玉川大学図書館木戸文庫をはじめ、長野県立図書館、岡山県金光図書館、福島鑄郎文庫に所蔵されている教育関係雑誌に、海外では、アメリカ議会図書館に所蔵されている WDC コレクションの教育関係雑誌にそれぞれ焦点をあてて、その所蔵状況と雑誌の性格を紹介した。

キーワード：教育関係雑誌 占領期 プランゲコレクション WDC コレクション

1. はじめに

本稿は、アメリカ合衆国メリーランド大学マッセルディン図書館に所蔵されているプランゲコレクション以外の、国内外の占領期に創刊された教育関係雑誌の所蔵調査についてまとめたものである¹⁾。

筆者は、これまで、教育ジャーナリズム史研究に取り組んできた。なかでも、敗戦直後から 1949 (昭和 24) 年までを研究対象とし、教育関係雑誌や新聞が、いつ、いかなるニーズによって創刊され、その隆替はどうであったのか、また、各誌が、どのような教育情報を掲載し、伝えようとしていたのか、記事内容の分析を通して明らかにすることを目的とし、研究を進めてきた²⁾。

戦後日本の教育ジャーナリズムを本格的に取り上げた研究は、皆無に等しく、本研究が最初のものであり、この研究を重ねていくことにより、敗戦直後の日本の教育ジャーナリズムの世界を明らかにすることができると考えている。また、雑誌・新聞の全貌

や性格を明らかにすることにより、教育関係雑誌や新聞に史料の関心をもつすべての研究者に公共の便を役立てることが可能である。さらに、執筆者ならびに記事傾向の分析を行うことにより、今まで発見できなかった論稿や記事を見つけることが容易になる。なかでも、人物研究に大きな影響を与えることになるだろう。加えて、記事内容の分析を通じて、当時の教育課題や教育の実相にも迫ることもできると考えている。

以上の点から、占領期における教育関係雑誌の書誌的研究を行うことは、資料的意味が大きい。

周知のように、1945 (昭和 20) 年から 49 (昭和 24) 年にかけて、わが国において創刊された雑誌や新聞は、国内最大の蔵書量を誇る国立国会図書館でさえ、所蔵されている雑誌や新聞は少なく、国立国会図書館の「収集の空白域」と呼ばれてきた。この「空白域」を埋める貴重な史料として、アメリカ合衆国メリーランド大学のプランゲコレクションが注目され、筆者もコレクションを使用し、書誌的研究を進めてきた^{3) 4) 5)}。

しかし、コレクションを閲覧していく過程で、コレクション以外にも、多数の雑誌が存在することに

* 中部大学現代教育学部児童教育学科
中部大学現代教育学研究所

気づき、国内外の図書館の調査を重ねてきた。

ここでは、新たに国内外の図書館などで発見したプランゲコレクションに見られない占領期の教育関係雑誌の所蔵状況と雑誌の性格について紹介したい。

2. 国内調査

(1) 玉川大学図書館木戸文庫

最初に取り上げるのは、玉川大学図書館木戸文庫である。同文庫には、故木戸若雄氏が収集した戦前から戦後にかけて創刊された数多くの教育関係雑誌が所蔵されている。その大半は、『玉川大学学術研究所蔵書目録』（1979年）の中に収められ、多くの研究者に利用されてきた。

しかし、1990年代に入り、木戸文庫の蔵書整理が進み、1990（平成2）年、従来の目録に未掲載の雑誌が、新たに51種類追加登録された。このことは、あまり知られていない。

調査の結果、他の図書館に所蔵されていない占領期に創刊された教育関係雑誌が9種類あることが確認できた。以下、誌名を記しておこう。

1. 『人間科学』創刊号 柏書院 1946年9月1日創刊
2. 『子供と社会』創刊号 協和図書出版株式会社 1947年7月10日創刊
3. 『子どもの美術教室』第1号 学童美術協会株式会社 1947年10月15日創刊
4. 『児童劇場』復刊3号 児童劇場社 1948年3月25日発行
5. 『職業と教育』第1号 職業教育研究会 1949年5月20日創刊
6. 『図書教育』創刊号 目黒書店 1949年10月1日創刊
7. 『教育実験』創刊号 杉山書店 1949年11月3日創刊
8. 『才能教育』第1巻第1号 才能教育研究会 1949年12月1日創刊
9. 『中学教材』第1号 東京教育出版株式会社 1949年創刊

ここでは、紙数の関係上、すべての雑誌を紹介することはできないため、『人間科学』『子供と社会』

『図書教育』の3誌の創刊号を紹介したい。

①『人間科学』創刊号

本誌は、1946（昭和21）年9月1日、応用心理学会（代表者横山松太郎）の機関誌として、「人間の関与するあらゆる研究の原著、紹介等をのせて広く深く人間性、人間活動の法則またはその応用特にいろいろの社会の実際問題の解決に対する光を与えるやうにありたい」という趣旨のもとに創刊されている。また、本誌の母胎である応用心理学会は、同年3月17日、「心理学オヨビコレニ基ク學術技芸ノ応用発達ヲ図リモッテワガ国文化ノ向上發展ニ貢献スルヲ目的」として創立された学会であった。

創刊号には、K. T 生（編集人の田中寛一か）の「『人間科学』の創刊にのぞんで」をはじめ、武政太郎（東京文理科大学教授）の「デモクラシーと教育—ジョン・デューイの教育思想」、柿内三郎（東京帝国大学名誉教授）の「内分泌学から観た性格学」、杉田直樹（名古屋帝国大学教授）の「浮浪女子少年の生態」、小保内虎夫（東京文理科大学教授）の「新日本の建設と心理学」、フランク・フリーマン（カナダ大学教育学部長）の「現今アメリカの心理学界と教育界」、「応用心理学会記事」など、多彩な論稿を掲載している。続いて、「新生三態」と題して、兼子宙の「教員組合の新生」、望月衛の「教育映画の新生」、大貫雅敏の「スポーツ精神の新生」の3つの「新生」論稿を載せ、最後に、「研究室探訪」と題して、「労働科学研究所」や「脳研究室（東大医学部附属）」の紹介、松村康平の「性格の研究」、鈴木清の「終戦後における日本の教育事情に関する調査」、植松正の「虚偽自白の原因とその防止」、盛永四郎の「精神病患者の作業能力に就て」、古川晴男の「日本産奴隷狩蟻の行動観察」を収載している。

なかでも、フランク・フリーマンは、米国教育使節団の一行中の著名な教育心理学者であり、来日中の1946（昭和21）年3月29日には、日本大学本部内会議室で、米国の心理学会の情勢などについて報告をした人物として知られている。また、鈴木清の論稿は、「戦後における日本の教育事情を明らかにすることによって、日本再建のため必然的に行われべき教育改革の方向を探究しようとした」論文であり、当時の教育改革の方向性を示した論稿として

興味深い。

②『子供と社会』創刊号

本誌は、1947（昭和22）年7月10日、兵庫県尼崎市にあった協和図書出版株式会社から創刊された教育関係雑誌である。

本誌は、管見に入る限り、玉川大学図書館木戸文庫と次に紹介する長野県立図書館のみ所蔵しており、プランゲコレクションには、第2号しか所蔵されていない。

また、創刊号の表紙のタイトルには、「子供と社会」の前に「少年愛育」の文字が付けられており、発行人には、橋本三郎が、編集人には、石橋麒一郎が記載されている。

創刊号の裏表紙には、大阪少年審判長であった渡部善信ならびに京都少年審判長であった宇田川潤四郎の両名が、「発刊に寄せて」を掲載し、「戦後日本の社会に露呈されてある数々の子供の問題、即ち戦争によってその父母を失った戦災孤児や、街頭に彷徨する浮浪児、外地引揚の少年や児童、或は戦時中に捨てて顧みられなかった精神薄弱児や、性格異常児の處遇や、その教育、更に又日毎に激増して行く所謂不良少年の問題、一方亦一般児童や少年の積極的福祉増進の問題等、何れもその解決に一刻の猶予遅滞を許されない極めて重要な問題であると思ひます。此の時に當つて現代の日本の子供を繞る各種の社会問題の解明と、その解決への指針として創刊した」旨が記されている。

本誌の第一の特徴として、敗戦直後の深刻な青少年問題を扱った多くの論稿を収録している点があげられる。

創刊号には、巻頭論文として、当時、龍谷大学教授であった福島政雄の「母親の力」を載せ、愛児のために悩み続ける人達への指針を示している。また、次の野上俊夫（京都帝国大学名誉教授）の「青少年の教育に対する社会的影響」は、教育者はもちろん、前途に希望を失っている人達の道標を示し、さらに、佐伯千仞（元京都帝国大学法学部教授）の「少年期の精神構造と近時の少年犯罪」は、実務家や教育家に何らかの示唆を与えようとした論稿であった。続いて、和田良平（元名古屋控訴院検事長）の「防犯は保護から」や辻三省（浪速少年院長）の

「誰を責めたらよいでせう」も掲載するなど、多くの青少年問題を取り上げている。

第二の特徴は、「『子供と社会』を語る」というテーマの下に、日頃少年保護のため、啓蒙運動や実際の保護の活動をしている人達による座談会の記録を掲載した点があげられる。

座談会には、菊谷俵太郎（京都少年審判所少年審判官）をはじめ、徳武義（同所少年保護司）・大西つる子（京都少年保護協会幹事）・内山ふく子（同）・金谷年子（同）・永田弘利（立命館工業大学学生）・徳田良一（京大医専学生）・野波孝平（京都帝大学生）・小藪礼子（京都女子専門学生）・赤松和枝（同）・石橋麒一郎（本社編集部次長）が出席し、現在の社会がどのような悪影響を子どもたちに与えているか、どうしたらこの社会の悪影響を取り除くことができるかというテーマについて議論し、最後に、菊谷が、「生活の中心を打たてる事が根本問題で、これと併行して国民全体の力で子供を背負って行く、こういう事になれば子供達も起き上がるし、亦救はれるのではないか」と指摘をしている。

その他、本誌記者による「大阪少年審判所訪問記」をはじめ、古谷新・小出卓二（絵）の「初島の旅」、南部正太郎の「漫画・続綴方教室」、河井恒雄の「サンバツ」、阪野義信の「童話一年目」、童話作家千葉俊一の「映画「感激の町」雑感」、歌壇の吉井勇の「童話抄」、長沖一の「寝てゐた子供」、白川渥の「城崎にて」、宇井無愁の「うさぎ」、藤澤恒夫の「河童物語」を掲載し、各方面の厳正な批判と指導を仰いでいる。

最後に、同誌は、「敗戦以来激増して参りました少年の憂慮すべき悪化に就いて、之れを如何に純化善導するかに就て研究された論文や巷を放浪してゐる子供達の生態に対する街頭所見的な随筆又は青少年の犯罪実話、更生美談、隣人や義侠家の援 美談などを、青少年や、愛児の為に悩む人達の為に高尚に作文された」青少年問題に関する論文、随筆、寓話などを募集している。

③『図書教育』創刊号

本誌は、1949（昭和24）年10月1日、図書教育研究協議会の準機関誌として、目黒書店から創刊された教育関係雑誌である。創刊号は、本文60頁、定価

50 円であった。

同誌の第1回編集会議は、同年7月20日、日本教育会館で開催され、城戸幡太郎委員長が、「図書教育の研究は自分が文部省教育研修所在任中一早く構想したが実現をみなかった。今回国立教育研究所がこれを取上げ、図書教育研究協議会を創設し、準機関誌『図書教育』の編集指導をすることになったことは、日本の教育研究に新しい分野を開拓することである。」と創刊の経緯について説明している。また、委員には、勝田守一をはじめ、坂本一郎、佐野友彦、関野嘉雄、滑川道夫、深川恒喜、松尾弥太郎、宮原誠一、宗像誠也、依田新の10名が就任し、城戸委員長を中心に編集の基本方針を討議し、以下の方針を決めている。

1. 本誌は、あらゆる政党的、政治的色彩を有しないこと
2. 本誌は、図書教育に直接又は間接に関連する一切の組織運動、事業団体対して窓を開放すること
3. 本誌は、徒らにイデオロギーに捉われず教育の日常に役立つ実用性を発揮させること

次に、編集内容の基本構成について協議を行い、以下の点を決定した。

1. 新刊優良図書の紹介と解題
2. 教育研究と読書法（教師篇）
3. 教科学習と図書利用（生徒篇）
4. 図書の生態調査
5. カルチュラル・センターとしての学校図書図書館
6. 学校図書館のルポルタージュ
7. 学校図書館運営技術講座
8. 学校司書講座

8月10日には、国立教育研究所が、日高第四郎所長のもと、「図書教育」の方法に関する研究部門を確立し、同所の研究調査第四分室を中心に「図書教育研究協議会」を結成し、発会式を挙げた。その目的は、「図書教育に関する研究調査をなしその結果の普及に努める図書教育に係る機関、団体との連絡をはかり優良図書の普及に協力する」こととし、同研究所は、この目的を達成するための事業として雑誌『図書教育』の編集の指導に当たることになった。

創刊号は、上記の編集方針にもとづき、「学校図書館運動」の特集を組み、日本図書館協会選定委員会の選定による「新刊優良図書解題」をはじめ、日高第四郎（国立教育研究所長）の「図書教育について」、松尾弥太郎（東京都学校図書館協議会幹事長）の「新教育と学校図書館」、深川恒喜（文部事務官 中等教育課）の「学校図書館運動の展望」、「学校図書館の実態調査（高等学校の部）」、佐野友彦（梅ヶ丘中学校教諭）の「図書館を建設して」、石川春江の「娯楽から学習への進歩—児童の読書傾向—」、坂本一郎（東京学芸大学教授）の「学校図書館技術講座1 学校図書館技術論」を掲載する一方、彙報欄に「『学校図書館基準』並に解説」、「図書教育研究協議会生れる」、「東京都学校図書館協議会結成さる」、編集部による「学校図書館用品について（解説）」、「編集会議」を載せている。

なかでも、「新刊優良図書解題」は、1949（昭和24）年1月から4月にかけて発行された図書の中から総理府新聞出版用紙割当事務庁の納本を主とし、出版社から直接日本図書館協会に調査用として納入したものを加えたものを対象として選んでいる。「社会科学」をはじめ、「自然科学」「産業」「工学」「芸術」「語学」「文学」「児童読物」「絵本」など多岐にわたる領域の図書が紹介されている。

これは、他誌に見られない大きな特色である。

(2) 長野県立図書館

次に取り上げたいのが、長野県立図書館所蔵の7誌の教育関係雑誌である。1997（平成8）年4月、長野県立図書館が刊行した『長野県公共図書館新聞雑誌総合目録』を手がかりとしながら、同図書館に実際に所蔵されている占領期教育関係雑誌を紹介したい。

1. 『中等学習雑誌 学友』第1巻第1号 福地書店 1946年7月1日創刊
2. 『上伊那青年』夏季創刊号 長野県上伊那郡連合青年団文化部 1946年9月1日創刊
3. 『教育春秋』創刊号 教育春秋社 1946年10月1日創刊
4. 『子供と社会』創刊号 協和図書出版株式会社 1947年7月10日創刊
5. 『科学の学校 にじ』第1号 実業之日本社

1947年10月1日創刊

6.『図書教育』第1巻第2号 第1巻第3号
日黒書店 1949年11月1日、12月1日発行

7.『教育図書ニュース』創刊号 教育図書取次
協会 1949年12月1日創刊

ここでは、『中等学習雑誌 学友』『上伊那青年』
『図書教育』の3誌を取り上げ、それぞれの雑誌の
性格を紹介したい。

①『中等学習雑誌 学友』第1巻第1号

最初の『中等学習雑誌 学友』は、1946（昭和21）
年7月1日、福地書店から創刊された中等教育の学
習雑誌であり、編輯兼発行人には、福地恒男が担当
している。

創刊号には、山下正木の「一休さん（漫画物語）」
をはじめ、文部省教科書局長有光次郎の「新しい教
科書に就いて」、安彦孝次郎の「学生生活の回復」、
萩原恭平（文理科大学講師）の「精講 シェイクス
ピア物語」、竹澤啓一郎（横浜経済専門学校教授）の
「時事英語」、小林光（日米会話学校教授）の「英作
文の話」、野村猛の「中等数学講座」、高島春雄の「生
物講座」、日吉早苗（第一早高教授）の「水産講習所
訪問記」、近藤太郎の「高専入学試験問題の研究」、
大野寅之助（早大教授）の「漢文解釈の基本」、岡一
男の「古文解釈法講話」、佐藤尚勝（横浜医専教授）
の「ばらのとげ」を掲載している。

なかでも、有光次郎の「新しい教科書に就いて」
は、当時の用紙不足、戦災による印刷能力の著しい
低下などにより、新学年に一度に教科書を取り揃え
ることがいかに難しかったかを語る資料として注目
される。

また、創刊号に「次号予告」が記されている。現
物は所蔵されていないが、貴重な情報であるため、
目次を紹介しておこう。第2号の巻頭には、文部省
大学教育課長であった劔木亨弘の「高等学校三年制
教育内容刷新に就て」を掲載したのをはじめ、今哲
朗（東京帝国大学厚生課長）の「現代学生生活の実
態」、萩原恭平の「精講シェイクスピア物語（二）」、
野村猛の「中等数学講座（二）」、小林光の「英作文
の話（二）」、岡一男の「古文解釈法（二）」、高島春
雄の「生物講座（二）」、大野寅之助の「漢文解釈の
基本（二）」、松本環（元弘前高等学校教授）の「英

文和訳と会話、会話と和文英訳」、津田栄（第一高等
学校教授）の「鉄はなぜさびるか」、彦坂春吉（東京
朝日新聞記者）の「学校ニュース」、近藤太郎の「高
専入学試験問題の研究（二）」、日吉早苗の「第一高
等学校訪問記」、柴田武（東京帝国大学文学部助手）
の「ローマ字欄」を収録している。

②『上伊那青年』夏季創刊号

本誌は、1946（昭和21）年9月1日、「上伊那郡下
各町村青年団が大同団結し郡聯青の発足を見、郷土
青年として治発化しつつある時、青年各自の表情た
るを披瀝して共励切磋に一助たらしむ」ことを目的
として創刊された青年団の機関雑誌である。編輯兼
発行責任者には、上伊那聯合青年団文化部理事であ
る南向村の宮崎昌直が担当している。

巻頭には、団長の飯島九市の「巻頭言」を掲載し
たのをはじめ、文化部の「発刊に当りて」、遠藤要他
十三篇の「説苑」、津枝他九篇の「随筆」、「詩歌」を
収めている。後半では、「上伊那郡聯合青年団役員
氏名」をはじめ、「各町村男女青年団長」、「町村団の
動向」、「庶務部日誌」、「編輯後記」を収載している。

③『図書教育』第1巻第2号、第1巻第3号

すでに述べたように、本誌は、1949（昭和24）年
10月1日、図書教育研究協議会の準機関誌として創
刊された雑誌である。

これまでの調査では、創刊号のみが、木戸文庫に
所蔵されてきた。ここでは、新たに県立長野図書館
で見つかった第1巻第2号（11月1日発行）ならび
に第1巻第3号（12月1日発行）を取り上げたい。

第1巻第2号は、「社会科学習と図書教育」の特集
を組み、宗像誠也の「日本人の心性などに関連して」
をはじめ、「社会科学習のために図書をどう利用す
るか」というテーマのもとに、新國重人の「（小学校
篇）社会科学習と図書教育」、高橋清の「（中学校篇）
社会科学習の方法からみた図書の利用」、勝田守一
の「（教師篇）社会科を教えるために」、坂本健児・
大門潔・城戸幡太郎による「（座談会）図書館でみる
社会科学習の生態」、坪田譲治の「児童の読書につい
て」、玉虫文一の「我が子の読書指導」、阪本一郎の
「学校図書館技術講座（第2回）」、「学校図書館の問
題点」、「図書分類規準」「新刊図書解題」を掲載して

いる。

第1巻第3号は、「国語教育と図書教育」の特集を組み、石黒修の「国語の新教科書について」をはじめ、「児童生徒の読書力調査」というテーマのもとに、島津一夫の「児童生徒の読み書き能力調査について」、依田新・岡本奎六の「児童雑誌にあらわれた「ことば」の理解度」、春山行夫の「アメリカの子供の本」、今井田誉次郎他による「座談会 読書と国語教育」、阪本一郎の「学校図書館技術講座（第3回）図書選択法」、「新刊図書解題」などを収めている。

以後、いつまで継続して発行されたのか定かではない。

(3) 岡山県・金光図書館

次に、岡山県にある金光図書館に所蔵されている占領期教育関係雑誌6誌を紹介する。同図書館は、1943（昭和18）年9月8日、金光教徒社の付帯事業として設立され、1947（昭和22）年5月に開館された図書館であり、現在、蔵書数は、20万冊以上といわれている。

幸い金光図書館に所蔵されている占領下の教育関係雑誌を閲覧する機会に恵まれ、雑誌を閲覧させていただいた。学芸員である金光英子氏のご好意により、館長である金光和道氏にお目にかかり、特別に書庫の中まで見せていただく許可を得ることができた。金光英子氏が館内をご案内してくださり、同図書館が、創立当初から「図書館のための図書館では意味がない。利用され、活用され、生きてお役に立つ図書館でなくてはならない。」という方針を立て、「どなたでも、どこに住んでいても」利用でき、「全国どこでも、無料で貸し出し」を行っていると説明していただいた。全国の図書館に見られない利用者中心の図書館である。また、同図書館は、宗教関係の蔵書はもちろんのこと、金光教の教えにより「社会的弱者」である女性や子どもに関する文献も多く所蔵し、多数の家庭教育や子どものしつけに関する書籍をはじめ、児童書や絵本も多数散見された。

こうした特徴のある図書館の蔵書の中から、プランゲコレクションに含まれていない6種類の雑誌を閲覧することができた。以下、誌名を記しておこう。

1. 『英語 教育と教養』金子書房 1948年
2. 『ガイダンス』第1巻第1号～第1巻第5号

黎明書房 1949年

プランゲコレクションの欠号である第1巻第3号と第5号が所蔵されている。

3. 『季刊新児童文化』中央出版 1946年 季刊
4. 『教育時報』創刊号 岡山県教育委員会 1949年
5. 『社会学習』国民教育図書 第7巻第6号、第7巻第7号 1947年～49年
プランゲコレクションの欠号である第7巻第7号が所蔵されている。
6. 『民主教育』日本経国社 第2巻第4号～第3巻第3号 1947年～48年
プランゲコレクションの欠号である第2巻第4号が所蔵されている。

ここでは、それらの雑誌の中から『民主教育』第2巻第4号を取り上げて紹介をしたい。

『民主教育』は、1946（昭和21）年4月1日、日本経国社から創刊され、48（昭和23）年9月1日発行の第3巻第4号まで続いた教育関係雑誌である。

第2巻第4号は、47（昭和22）年8月1日に発行され、巻頭言には、「森戸文相の文教政策」を載せ、続いて、杉森孝次郎の「世界人権主義と教育」、木宮乾峰の「自由研究」、田中豊太郎の「自由研究の指導」、虎の門逸人の「昇格か降格か（教育時評）」、青木章心の「放送教育の必然性」、花田哲幸の「児童文化論」、石森延男の「ある問答（新読本の解説）」、丹呉典子の「『こくご』を手にして」を掲載している。

また、野瀬寛顕・岡田八郎・柏熊俊司・上田庄三郎による「教育雑誌編集者の座談会「教育技術」「教育文化」「教育改造」「民主教育」の編集者」を収録しているが、当時の教育雑誌をめぐる操觚界の様子を知ることができる貴重な史料である。

その他、法貴三郎の「藤原猶雪論」はじめ、百田宗治の「邊疆日録」、上田庄三郎の「民主評論」、「自由思想家植木枝盛」、安達健二の「教育基本法制定の経過」、吉川俊彦の「海外教育情報」など、多彩な情報を載せている。

最後に、「愛読者通信」として、法貴三郎の「三月号編集批判」、本田生の「新教育の三段階」、正木聖夫の「青年的迫力を」の3つの声を取り上げる一方、「ブックレビュー」と「編集手帳」も収載し、読者を意識した編集をしている点は、他誌に見られない

大きな特色である。

(4) 『福島鑄郎所蔵占領期雑誌目録 1945 年 8 月～1952 年 3 月』(文生書院) 2005 年

同目録は、故福島氏が、戦後雑誌研究のため、収集した約 1 万数千冊の雑誌の中から、占領期及び検閲期間中を含む 1945 年 8 月から 1952 年 3 月までの間に発行された雑誌の目録で、主に一般雑誌を中心に約 6000 冊を収録している。

福島氏は、約 6000 冊のうち、89 種類の教育関係雑誌を所蔵しているが、1949 年までに刊行された教育関係雑誌を試算すると、12 種類の雑誌が、プランゲコレクションに所蔵されていないことがわかった。以下、誌名を掲げておこう。

1. 『A. B. C』[1946 年 6 月]
2. 『ひらがなえほん』尚文社 [1947 年 5 月]
3. 『ATARASHI ROMAJI TOKUHO』永美書房 [1947 年 6 月]
4. 『中学生』新教育研究会 1948 年 1 月
5. 『学校の屋根』学校の屋根社 [1948 年 6 月]
6. 『P. T. A』日向書房 [1948 年 7 月]
7. 『教育と文化』週刊教育新聞社 [1948 年 8 月]
8. 『英誌研究』英誌研究社 1948 年 10 月
9. 『視学教育』視学教育社 1948 年 10 月
10. 『高校時代』順風学社 1949 年 1 月
11. 『国語と教育』信濃学用株式会社 1949 年 10 月
12. 『ガイダンス研究』牧書店 1949 年 11 月

3. 海外調査

(1) アメリカ議会図書館⁶⁾

最後に、海外コレクションの中から、数多くの雑誌を所蔵しているアメリカ議会図書館所蔵の WDC コレクション(戦前、戦後検閲資料及び文書)について触れておこう⁷⁾。

占領期の接収図書・雑誌は、ワシントン文書センターによって接収され、アメリカ議会図書館へ送られた日本の図書、雑誌は、20 万点を優に超えるといわれてきた。これが、現在、ワシントン D. C. にあるアメリカ議会図書館所蔵の WDC コレクション

にあたる。この蔵書は、日本への返還、他の図書館との交換、売却、廃棄など、多様な経路を経て今日に至っている^{8) 9)}。

詳細は、昨年、アメリカ議会図書館に司書として勤務しておられた吉村敬子氏が公刊した『戦前、戦後検閲資料及び文書』(全 3 巻 文生書院)に触れているため、ここでは、WDC コレクションの中に含まれている 3555 種類の雑誌の中から、プランゲコレクションに見られない占領期の教育関係雑誌の誌名と号数を紹介したい。いずれも、マイクロフィルム化されており、複写も可能である¹⁰⁾。

『新しい学校』興文館 第 3 巻第 5 号、第 9 号～第 10 号、第 12 号(以下、巻号名を略す)

『新しい教室』中興出版 4 (11～12)、5 (1～6)、6 (1～3)

『新しい小学校』興文社 2 (1、4、6)

『いとし児』(福岡) 2 (6、15) → 『育てつつ』 2 (3、5)

『いとし児』両親教育協会 1、3～5、7～8

『児童文化』(熊本) 43-5・6

『教育復興』新日本教育文化研究所 2 (10)、3 (3)

『教育現実』教育図書 1 (4～5)

『教育委員会通信』(京都) 4

『教育女性』学芸図書出版社 1 (5、7)

『教育建設』(札幌) 23、38、41

『教育公論』(小倉) 21 (6、11～12)、22 (1～2、4～6)

『教育公論』明治図書出版社 3 (11)、4 (10～12)、5 (1～3)

『教育社会』西荻書店 2 (3)、4 (12)、5 (1、6)

『教育新潮』教育新潮社 1 (1)

『教育思想』精神文化学会 2

『教育手帳』日本書籍 1、3～5

『教育図書ニュース』教育図書取次協会 2～4、6、15～16

『新教育タイムス』新教育事業協会 1、4、7

『図書教育』目黒書店 1 (2～3)、2 (6)

『6・3 教室』新教育協会 3 (10～12)、4 (1、4、7)

なかでも、『教育新潮』創刊号は、1950 (昭和 25)

年5月5日、北海道教育図書刊行会から創刊された教育関係雑誌であり、占領期に発行された雑誌ではないが、戦後5年間の教育を反省・検討し、占領期の教育の整理を試みた雑誌であるため、ここに紹介をしておきたい。

同誌の「教育新潮の立場」には、以下の4つの編集方針が示されている。

第一は、1950年を記念する意味もあるが、今日の世界が混乱をしているため、「一つの誌上に、多くの立場の論説や研究を掲載して、大方の批判をあおぎ、日本の教育界に新しいいぶきをふき込みたい」こと。第二に、「教育界を、前進のため整理する役割」を果たしたいこと。第三は、「地域性を尊重しながら、全体の統一を忘れぬ立場をとりたいこと」。第四は、「教育にたずさわるものの、人間的視野のせまさを解放しようということ」である。

創刊号の巻頭論文には、東京大学教授であった海後宗臣の「新しい職業・家庭科の出発」を掲載し、中学の中核的教科となる職業・家庭科を具体手にわかりやすくまとめたのははじめ、藤本藤治郎（北海道民事部教育課顧問）の「中等教育の再編成 高等学校を中心として」、梅根悟（東京教育大学教授）の「反コア運動」など、戦後教育に関する諸論稿を掲載する一方、梶浦善次（北海道学芸大学助教授）の「校長の望ましいあり方」をはじめ、手塚六郎（北海道立教育研究所長）の「現職教育と現職教育にのぞむもの」や浅沼英三（北海道教育委員会指導主事）の「現職教育のページ 教育職員免許法の疑点について」など、現職教育に関する記事も載せている。

また、小宮英太郎（北海道学芸大学助教授）の「学ぶということなど」、風巻景次郎（北海道大学教授）の「共学回想」、武田一郎（文部省視学官）の「最近米国の教育事情」、岡路市郎（道立教育研究所員）の「カリキュラム改造とスペシャリストの立場」、藤田喜一（札幌市立一條中学校教諭）の「ホームルームへの歩み（実践報告）」、谷幸雄（学芸大学旭川附属小学校教諭）の「北海道の小学校教育の前進（現場の声）」、「先生は神様である」、山下秀之助の「短歌」、「書評」、「あんちゅうもさく」など、多彩な記事を載せている。

最後に、吉田昇（お茶の水大学教授）の「青年教育におけるドクトリネーションの問題」や砂沢喜代

次（北海道学芸大学助教授）の「現職教育講座（一）教育社会学の動向」などの論稿を掲載して締めている。

その他、アメリカ議会図書館には、WDCコレクション以外に、占領期に創刊された教育関係雑誌を所蔵している。現在は、書庫の中の閲覧は難しいが、昨年、特別許可を得て書庫の中を閲覧させていただいた折、書庫の中に、雑誌の誌名と号数を記した手書きのカードボックスがあり、『民主教育』や『中等教育』などの現物を閲覧することができた。

4. おわりに

以上、国内外の図書館や文庫などから、占領期に創刊された教育関係雑誌の所蔵調査を進めてきた。

占領期に創刊された教育関係雑誌は、国内最大の蔵書量を誇る国立国会図書館でも、「収集の空白域」と呼ばれ、蔵書数が少ない。その「空白域」を埋める史料として注目されてきたのが、アメリカ合衆国メリーランド大学マッセルディン図書館が所蔵しているプランゲコレクションである。

しかし、今回の資料調査で明らかのように、プランゲコレクションに含まれない教育関係雑誌が存在することを確認することができた。これらの雑誌を整理し、プランゲコレクションと合わせて、占領期における教育関係雑誌の全容を解明していきたい。

また、近い将来、これまでの調査をもとに、『占領期における教育関係雑誌総覧（稿）』ならびに『占領期における教育関係雑誌目次集成（仮）』を作成したいと考えている。

註

- 1) アメリカ合衆国に在る日本教育に関する史料については、佐藤秀夫「アメリカ合衆国に在る日本教育に関する史料について」（『文部時報』第1260号～1263号 ぎょうせい 1982年5月～8月）が詳しい。
- 2) 『戦後日本における教育ジャーナリズムに関わる基礎的研究 平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（C）研究報告書）2006年』
- 3) 山田邦夫「占領期検閲雑誌の整理・保存事業について」（『Intelligence』創刊号 紀伊国屋書店 2002年3月23日 26～32頁）

占領期における教育関係雑誌所蔵調査報告

- 4) 村上寿世「プランゲ文庫の現状報告」(『メディア史研究』第2号 ゆまに書房 1995年2月15日)
- 5) 坂口英子「メリーランド大学マッケルディン図書館
ゴードン W. プランゲ文庫」(『Intelligence』第4号
紀伊国屋書店 2004年5月13日 58～64頁)
- 6) 藤野幸雄『アメリカ議会図書館 世界最大の情報センター』中公新書 1998年
- 7) 吉村敬子「米国議会図書館における WDC コレクション」(『Intelligence』第10号 紀伊国屋書店 2008年8月)
- 8) 和田敦彦『書物の日米関係 リテラシー史に向けて』新曜社 2007年
- 9) 和田敦彦「日米関係史の中の図書館 アメリカにおける日本語図書館の形成史から」(『図書館・アーカイブスとは何か』藤原書店 2008年11月30日 204～209頁)
- 10) 岡崎倫子・柴田希「米議会図書館とプランゲ文庫との比較調査(上・下)」(『リテラシー史研究』第1号、第2号 リテラシー史研究会 2008年1月、2009年1月)

受付日 2010年9月30日

受理日 2010年11月29日